

大岡昇平集

10

岩波書店

大岡昇平集 10

第十四回配本(全十八卷)

一九八三年九月二十六日 第一刷発行

定価四六〇〇円

著者 大岡昇平

発行者 緑川亭

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目
発行人 株式会社 岩波書店

電話 〇三上六五二二
振替 東京六三六四〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

レイテ戦記

死んだ兵士たちに

凡 例

一、人名、地名は原則として原音によったが、すでに当時の各種文献に慣用されているものはそれに従った。〔例〕ルーズベルト

二、日付、部隊号は和数字表記、日数、数量は数字列記で表わした。〔例〕八月十五日 歩兵第四十九聯隊 一六〇日 二三〇機

ただし米軍部隊番号は数字の列記とした。〔例〕米第三〇五連隊

三、日米両軍を区別するために、米軍は原則として上に「米」をつけた。〔例〕米第七師団
ただし継続的に現われ、混乱のおそれのない場合は省いた。日本軍は「聯隊」、米軍は「連隊」と書いて識別しやすいようにした。

四、日付、時間は当時日本軍が使用したもの(内地標準時間)である。これはアメリカ軍使用の時間(ワシントン時間マイナス9)と一致し、現地時間は一時間おそくなっている。なお時間は次のように表わした。〔例〕〇一三〇〥午前一時三十分

五、引用文献中の小活字は著者の注である。

本文図版中の符号、記号

〈符号〉

A	軍、野砲兵聯隊
Ab	砲兵大隊
As	独立砲兵聯隊
B	旅団
Bs	独立混成旅団
D	師団
FA	航空軍
FL	野戦病院
i	歩兵聯隊
ibs	独立歩兵大隊
is	独立歩兵聯隊
K	騎兵聯隊
KD	騎兵師団
P	工兵聯隊

SO 搜索聯隊

T 輜重兵聯隊

I II III 大隊番号

□ 内は米軍部隊

〈記号〉

♫ 軍司令部

♪ 師団司令部

☆ 旅団司令部

♫ 聯隊本部

♫ 大隊本部

♫ 砲兵陣地

♫ 砲兵観測所

井 飛行場

⊥ 師団戦闘地境

⊥ 軍戦闘地境

目次

凡例

十九	和号作戦	2
二十	ダムラアンの戦い	22
	昭和十九年十一月二十三日—十二月七日	
二十一	ブラウエンの戦い	71
	十二月六日—七日	
二十二	オルモック湾の戦い	112
	十一月二十七日—十二月七日	
二十三	オルモック周辺の戦い	157
	十二月八日—十五日	
二十四	壊滅	193
	十二月十三日—十八日	
二十五	第六十八旅団	232
	十二月七日—二十一日	
二十六	転進	253
	十二月十二日—二十一日	

二十七	敗軍	十二月二十二日—三十一日	301
二十八	地号作戦	昭和二十年一月一日—二十日	370
二十九	カンギポット	一月二十一日—四月十九日	428
三十	エピローグ		490
付録			
	太平洋戦争年表		550
	レイテ島作戦陸軍部隊編成表		556
	書誌		607
	あとがき		608
	作者の言葉		613
解説		大江健三郎	623
解題		池田純溢	641

レイテ戦記
(下)

十九 和号作戦

総理大臣小磯国昭大将の「レイテ島は天王山」は有名であるが、彼がこう叫んだのは案外おそく、十一月八日の最高戦争指導会議の後である。台湾沖航空戦の戦果発表の時のキャッチフレーズは「勝利はわが上に」である。比島決戦は、組閣後最初の最高戦争指導会議の席で決定していたが、レイテ島を天王山といい切るためには、相当の自信、もしくは危機感がなければならなかった。

十一月八日は米軍上陸二〇日目である。比島沖海戦によって聯合艦隊はすでに無く、敵は東海岸の要地を占拠し、第一師団はリモン峠で苦戦中であった。現地ではすでに米上陸軍を追い落すのは不可能という認識が生じていた。台湾沖、レイテ沖で四〇隻の空母を沈めても、なお一五隻が東方海上に健在で、マニラ・レイテ間の輸送路は常に艦載機の爆撃にさらされ、マニラ湾は日本軍艦の基地と化していた。

方面軍が最初に「和号作戦」の構想を得たのは五日ごろであるが、五―六日のマニラ空襲によって自信を失い、七日武藤方面軍参謀長はレイテ戦打切りを総軍に意見具申した。

武藤参謀長は、大本営も南方総軍も現実を認識する柔軟性を欠いている、とまでいった。総軍も表

向きはレイテ戦続行を口にしながら自信を失い、十二日大本營の「英断」を請うていたことは前に書いた。レイテ戦は最高戦争指導会議つまり大本營の方針によって続行されたのであった。

「第三十五軍の作戦記録」(第一復員省、昭和二十一年十月)では、十四方面軍から「和号作戦」要旨を受けたのは、十一月十二日になっている。公刊戦史によれば九日である。この間に「尚戦電一二八号」という怪物が挿まって、総軍の「英断」上申電となり、和知軍参謀長任命となって「和号作戦」実施、レイテ戦続行となる。十二日に第三十五軍に要旨を再下達という異常なことが行われる。

方面軍命令(九日)の要旨

一、敵ノ航空勢力漸増ノ現状ト我ガ空海作戦ノ必要上竝ニ爾後ノ『レイテ』作戦ヲ有利ナラシムル為、方面軍ハ速カニ『ブラウエン』飛行場、『ドラツグ』方面航空基地群ノ覆滅ヲ企図ス。

二、依ツテ貴官ハ新ニ到着セル第二十六師団ノ全力ヲ『アルプエラ』―『ブラウエン』道ニ投入、且ツ速カニ之ヲ『ブラウエン』附近ニ進出セシメテ敵ノ航空基地群ヲ覆滅セシメ、已ムヲ得ザルモ山地ヨリ火力ヲ以テ其ノ使用企図ヲ抑制セシム。

三、『カリガラ』方面第一師団ハ速カニ山地ヲ通過シテ敵ノ背後ニ進出、之ヲ『カリガラ』灣ニ圧倒、以テ該方面作戦ノ自由ヲ確保セシム。

これは乏しい兵力を二方面に分散することであるから、第三十五軍の困惑は察するに余りある。ことに期待の二十六師団が重火器、軍需品を揚陸できず、一万名が裸で上陸しているのだから尚更である。イビルで師団の上陸状況をつぶさに調査した小幡後方参謀が十一日夕刻軍司令部に帰着した後、「尚

戦電第一二八号」は発せられたはずである。それは既に受取った方面軍の「和号作戦」要旨とも、状況とも合わない変なもので、すでに第十四章(上巻)で紹介したが、再録しておく。

「尚戦電第一二八号」

既報ノ敵情竝ニ第一師団ノ戦況ニ鑑ミ集団ノ爾後ノ企図左ノ如シ。

一、方針 集団ハ先ヅ『カリガラ』方面ニ突進セル敵ノ衝力ヲ逆用シ敵ヲ同地周辺地区ニ於テ各個ニ撃破、速カニ『サバニトン』河(『カリガラ』東南方一六浬)ノ線ニ進出、爾後敵航空基地ニ対スル本格的作戦ヲ準備セントス。攻撃開始ハ十一月二十日以降ト予定ス。

二、指導要領

(一) 第一師団ヲシテ当面ノ敵ヲ駆逐シ浸透戦法ニヨリ『カリガラ』西南方高地ノ線ニ進出シ『カリガラ』方面ニ対シ圧迫スル如ク對抗セシム。

(二) 第二十六師団ヲシテ上陸ニ伴ヒ主力ヲ以テ『ドロレス』―『ハロ』道方面ヨリ先ヅ『ハロ』ヲ攻略シ『ダガミ』方向ヨリスル敵ノ攻勢ヲ阻止スルト共ニ『トンガ』方向ニ対スル爾後ノ攻撃ヲ準備セシム。

(三) 第六十八旅団主力ハ第二十六師団後方ニ進出セシム。

(四) 状況之ヲ許ス限リ第六十八旅団、歩兵第五聯隊ヲ基幹トスル部隊ハ大舟艇機動ニ依リ『サバニトン』河河口附近ニ上陸シ『サンミゲル』方向ノ敵ノ側背ニ進出セシム。

(五) 第三十師団(歩三箇大)ハ到着ニ伴ヒ速カニ『ブラウエン』西方地区ニ進出セシメ第十六師団

ト協同シ敵航空基地ノ制扼及該方面敵主力ノ牽制ニ任セシム。

(六) 各方面ノ準備完了ト共ニ攻撃ヲ開始シ一挙ニ敵ヲ撃滅ス。

右ニ関連シ方面軍ニ要望スル事項

(一) 『カリガラ』湾ノ制海、為シ得レバ艦砲射撃ニ依ル直接協力之ガ為『サンフアニコ』水道ノ制扼ヲ先決不可欠ノ要件トス。

(二) 第三十師団急輸ノ為高速輸送艦ノ派遣。

(三) 飛行機ニ依リ敵ノ砲撃ヲ制圧特ニ観測機ノ撃墜。

右ニ関シテハ従来ヨリ上申セル所ナルモ重ネテ御配慮相成度。」(傍点筆者)

この作戦内容は、十月下旬に前線に向う第百二師団情報参謀金子少佐、十一月一日オルモックに上陸した第一師団長片岡中将に示した「カリガラ作戦」より積極的なもので、リモン北峠が敵手に帰し、ハロ、トゥンガ方面に米軍の充満した現状に合わない、とんちんかんなものであった。上陸を終った二十六師団の戦力喪失が悩みの種ならば、それをはっきりいえばいいので、「上陸ニ伴ヒ」なんて呑気な句は奇妙であるし、ハロ方面使用に固執しているのは、そもそも和号作戦の趣旨に反する。

この電報は「三十五軍の作戦記録」にはなく、大本営電報綴に、十四方面軍の転電によって記録されたものであるが、日時が正式に入っていないのが気になる。方面軍の転電時は十一日二三〇〇であるにしても、もう少し前のものではないか、という疑いが残る。ただし九日より遡ることはできない。カリガラ東方十六キロ、サパニトン河口に逆上陸とあるのは、むしろ「タクロバン作戦」への復帰

であるが、使用兵団に六十八旅団と共に第五聯隊の名がある。第五聯隊とは第八師団(杉)の第五聯隊で、後にバロンポンに上陸して善戦することになるが、方面軍がこれをレイテ島に使用を決定したのは十一月九日である。方面軍参謀がそのレイテへの輸送計画を研究中の十一日夜、前記尚戦電第一二八号が到着した。方面軍では関係方面へ転電、南方総軍が受取ったのは何時だかわからないが、翌十二日〇一三五大本營にレイテ戦打切りの「英断」を求める電報を打ったという。

十一日一六〇〇、三十五軍は第一師団に十五日を期日として決戦準備を命じている。十三日の第一聯隊の本道方面招致はその結果であるが、尚戦電一二八号は決戦を二十日以降という。これは後に師団に下命された日付で、軍の心づもりを明示しているともいえる。

ところで方面軍は一体いつブラウエン攻撃を考えたか。レイテ島東岸の敵航空兵力破摧は、レイテ戦続行にも、ルソン島の安全のためにも必要であるから、それはかなり早く十一月五日以前である。同日は、岡林諄吉情報参謀(後に第一師団参謀長)、中台清吉通信参謀をレイテへ派遣しようとした。ところが五―六日には米三八機動部隊のマニラ大空襲があった。これは既述のように、日本本土空襲の予定を延期し、日本軍のレイテ決戦輸送の妨害に作戦変更した第一波で、空中地上で四三九機が撃破され、重巡「那智」がマニラ湾で沈んだ。

これらの状況は、第三者の位置にある在比海軍の左の電報に、公平に観察されている、と筆者に映る。

「南西方面艦隊十一月六日〇七四三発(一部)」

三、第三十五軍ノ作戦指導ノ方針 第三十五軍ハ注入スベキ第二十六師団、第百二師団及第六十八旅団を以テ『カリガラ』方向ヨリ重点ヲ山寄リニ『タクロバン』ニ指向ス。

『タクロバン』攻略後『ブラウエン』地帯ヲ攻略スルニ在リ。之ニ対スル第十四方面軍ハ平地ニ決戦場ヲ選ブハ有力ナル敵ノ機甲部隊ニ対シテ不利ナルヲ以テ之ヲ避ケ『カリガラ』『ダガミ』道西方山寄リニ兵団主力ヲ南下、第十六師団ト連絡ヲ確保スルト共ニ一部有力ナル部隊ヲ『アルブレラ』『ブラウエン』道ヲ東進、主力ノ戦闘ニ策応、『ブラウエン』飛行場方面ニ対シ概ネ十一月十五日頃ヨリ本格的攻勢ニ転ズル如ク指導スル方針ナリ。而シテ第十四方面軍主脳部ハ現状ノ如キ航空勢力(彼我四対六)ヲ続ケ得ルモノトセバ有利ニ作戦ヲ指導シ得ルモノト判断シアルモ一部幕僚ハ極メテ戦況ヲ不利ニ判断シアリ。」

この結果が七日から十一日に至る方面軍と総軍のレイテ戦切り論議であつたことは、既に書いた通りである。方面軍十一日深更「尚戦電一二八号」を総軍に転電したとすれば、一旦決定されたレイテ続行について、現地軍に実施の意向のないことを告げて、再考を促したことになる。

そこで総軍の「英断」上申電になつたとすれば、筋が通る。ただしその内容は十分に想を練られたものである。七日以来の方面軍との討議の結果、徐々に形成された思想で、「尚戦電第一二八号」に二時間で反応したものとは思われない。左にその一部を掲げておく。

「軍事極秘、親展、特別緊急、威参一電第五七六号(十二日〇一三五)

『レイテ』決戦ヲ中心トスル比島作戦ノ推移ニ対スル觀察左ノ如シ。

一、判決　比島正面作戦ノ推移ハ遽カニ予断スベカラズト雖モ現下ノ戦勢ハ『レイテ』決戦ノ長期化ヲ予測セシムルト共ニ本決戦ノミヲ以テ作戦ヲ終末シ得ズ。更ニ長期ニ亘ル決戦ヲ連続スルノ決意ト準備トヲ要スルモノアルヲ思ハシム。

二、觀察(省略)——航空兵力劣勢をはねかえす見込なし、敵は新しい作戦を用意しあるべし、など)

三、以上ハ現下戦局ノ様相ヲ冷静ニ判断シ全般作戦ノ推移ヲ予断セルモノニシテ、『レイテ』決戦ガ茲ニ冒險性ヲ包藏シツツアルハ争フベカラズ。然レドモ以上ノ判断ハ現実ニ於テ確實ナラズ、敵ノ企図ヲ前提トシアル反面『レイテ』決戦ハ真ニ皇國ノ運命ヲ決シ而モ今後ノ作戦ノ帰趨ヲ左右スルノ地位ニ在リテ而モ之ガ成算ハ尚求ムベキモノアリ。軍ハ茲ニ大命ノ下方策ヲ尽シ總力ヲ傾ケテ之ニ邁進スベキハ固ヨリナリ。況ンヤ之ヲ直ニ放棄シテ南方軍自体ヲ以テ『ルソン』決戦ヲ準備セントスルモ果シテ之ニ幾干ノ期待ヲ嘱シ得ルヤ疑問ナルニ於テヤ。尚敵ノ爾他正面進攻必至ヲ予期シアルモ之ガ全面的覆滅ヲ差当リ期待シ得ザルニ於テモ『レイテ』決戦ヲ含ム全般作戦ヲ(電報班註　二語不明)彼我ノ死闘抱合ニ導クヲ以テ敵ノ戦力ヲ分散漸減シ且ツ其ノ態勢ヲ押切ツタル状況ニ陥レ、茲ニ最後ノ反撃決勝ヲ求ムルモ亦準備スベキ方策ナリト判断セララルニ於テハ重ねテ大本營ノ御英断ヲ望ム次第ナリ。

これに対する大本營の参電九〇三号は「十三日一三〇〇起案終り、一六五〇総長決裁、二二〇〇発電」で、儀礼的で鄭重なものであるが、和知鷹二中将の軍参謀長任命電は十二日昼「内定、発令を待たず速かに赴任」というものだったから、やはり人事が先だった。